

## 東南アジアへの船旅

大阪大学経済学部助教授 長 浜 穆 良

## 青年の船

「私儀このたび総理府『第四回青年の船』教官として、2月5日から51日間全国の青年 300 余名とともにフィリピン、インドネシア、マレーシア、インド、シンガポールおよび台湾を訪問することになりました。留守中何かと御迷惑をおかけすることと存じますがよろしく願い申し上げます。敬具、昭和46年1月」これが出発にあたって差出したわたくしの挨拶状の一部だが、総理府は青年の船の主旨をつぎのように要約している。

「明治百年を記念して始まったこの事業は、日本の青年を『青年の船』にのせ、船中での研修や規律のある団体生活を通じて、まず青年たちの心身を鍛錬し、巡航先で各国青年との交歓、各地の視察見学などによって国際協力の精神を養い、青年たちに日本の姿を正しく理解させようというものである。

今回の乗船者は、団長、副団長、教官16名、班長、渉外団員のほかに一般団員 319 名、管理部要員その他19名、計 354 名であったが、とくに今回はインドを除く訪問国の青年男女 30 名を、それぞれの国の港まで乗船させたので、総員 384 名であった。」

## 出航の日（2月5日）

東京の晴海埠頭に横づけされた「さくら丸」（巡航見本市協会所属、商船三井客船運航、期間中総理府がチャーター、12,629総トン、航海速度17ノット）に前日の4日乗船、全員身辺整理を終え、本日は午後に出航式に備え、午前中リハーサル。

早朝より何年に1度という快晴で、気温も高く、夜来の風でスモッグも吹き払われ、信じがたいことだが白雪をいただいた富士が箱根・丹

沢の山々のかなたに端麗な容姿をあらわしていた。

暖かいといっても2月5日、南方むきに作られたわれわれの制服、とくに女子の制服はミニスカートに半袖、男子は制服の下にたくさん下着を着込んでいるが、女子はステテコをはく訳にもいかず、風邪をひく者が出ないかと心配された。しかし、さいわい、終日、風1つ、雲1つない小春日和、幸先のよい出航日であった。

午前中、見送人の船内見学などがあり、午後埠頭での簡単な出航式後、2時に船は岸壁をはなれた。紅白の制服に純白のベレー帽をつけたはちきれんばかりの女子鼓笛隊、白の制服に白ベレーのバトンガール、ブラスバンド、何千本という五色のテープ、お互いの名を呼び合い、別れを惜しむどよめき、ドラの音、蛍の光、このせちがらい世の中に、打算を忘れた感激のひとつときである。筆者の妻と小学校4年の娘も大阪から新幹線の1番でやってきて、最後の最後までスカーフを振っていた。あとできいたところ、双眼鏡で見えなくなるまで見ていたそうである。

東京湾内は船も多く賑やかな感じで、眼前をゆるやかに京浜工業地帯が過ぎていく。やがて三浦半島をよぎり、何百という鷗に送られて外洋に出た。

この頃から船は少し揺れだしたが、あとあとの揺れにくらべれば、さざ波みtainなものである。午後4時すぎ、短かい冬の陽が西に傾く頃、右前方に黒々と横たわる伊豆大島のシルエット、さらにそのむこう右に天城の山々がみえる。「伊豆の踊子」が南へ越えた山々である。電車が通るようになって東伊豆はほこりぼくになったが中伊豆、西伊豆はそうでもなかるう、などと思う。

### 船長招待夕食会（2月5日夜）

6時から7時半までバンケット・ホールで船長招待の夕食会。バンケット・ホールで食事をするときは必ず第一装、船内は冷暖房完備だから温度や湿度で苦しむことはないが、靴、頭髮、ひげの手入れなどもやかましく、不精者のわたしにはたいへんである。3百数十名の立食パーティで、船長挨拶、1等航海士、機関長、ドクター、通信長、厨房長の紹介、そのあと御馳走をふんだんにいただく。こと食事に関する限りたいへんなぜいたくで、テーブルのサンドイッチ、オードブルのほか、まわりには、すし、おでん、水だき、焼肉、焼鳥、そば、デザートなどの模擬店がならび、お代わりOKである。船では平素の食事でも2人前はおろか、3人前位が盛りつけられることがあって、残さないうで食べるのは困難である。厨房担当だけで90名の船員が乗っているのをみてもいかに食事を重視しているかがわかる。パン、豆腐、こんにゃく、などの加工食品も、みな船内で製造される。果物類などは安い寄港地でうんと仕入れてある。本船は、元来、見本市船として設計されているので、バンケット・ホール、ラウンジ（ロビー）などは来客、レセプション用にずいぶんぜいたくに作られている。このようなわけで、たまには一流の料理にありついている筆者にもこの夕食会は華やいだデラックスなものにうつつた。ただ1つ残念なのは船内秩序維持のためアルコール厳禁になっていることである。時間と場所を決めてなら良いようにも思えたが、結果的には6時起床から10時就寝までのきついスケジュールでは51日間とてもそんな余裕はなかったといってもよかった。

このあと教官会議があり、筆者は東南アジア同乗青年担当（兼務、本務は東南アジアの経済事情担当）として、カリキュラムの再編、了承をうけるなどの後やっと居室に落ち着いた。

気が付いてみると船はかなり揺れており、窓から外をみると真暗な海に激しくしぶきが飛んでいる。9時頃、海田教官（農博、京大東南アジア研究センター、東南アジアの農業事情担当）に誘われるままレインコートに身を固めてブリ

ッジ屋上の上甲板の先端に出てみる。船は大きくピッチング（縦揺れ）し舳先が波を切るときは水面上22mの位置までザーとくる。なかなかおもしろい。波高は3m位であろう。波高5mで普通の人なら危険を感じ、気の弱い人ならひっくり返るんじゃないかとまじめに考える。しかし、筆者が思うのに、波高5mでも潜在危険は飛行機の方がはるかに大きい。わけは簡単だ。ヤツは足が地についてないから。緯度が西へ経過しているので時計を15分遅らせて眠る。

### 船酔い続出（2月6日）

6時起床。潮の岬沖200キロとのこと。大阪の留守宅にむけてその旨電報をうつ。電報料金は外洋上のどこからでも、いつでも国内と同じでまた日本から船に打つ場合も「長崎無線局、さくら丸」宛で同じ料金でうてる。ただ外地寄港中はだめである。6時半朝のつどいで体操、訓辞、連絡などがある。船内は何事も5分前集合、時間厳守である。

潮の岬は見えないかと探してみたが無駄であった。視界半径は意外に短い。概算ならつぎのようにして暗算で出せる。

視界半径(海哩) $\div 2 \times \sqrt{\text{水面上の高さ(m)}}$   
たとえば、水面上25メートルの甲板からの視界半径（水平線までの距離）は25メートルの平方根の5の2倍、10海哩、これを2倍した20から1割引いた18キロメートル（海哩=1852mの概算）となる。むこうからやってくる敵の軍艦のブリッジも25メートルの高さだとすれば、おたがいに相手を発見したときの距離は約36キロ、これだと40インチ砲は届くから「撃てー」ということになる。がこれは昔のぶっそうな話。もっとも、レーダならどうかという問題がある。レーダーは至近距離、4マイル、8マイル、12マイル、24マイルというように範囲を拡大できるが24マイルだと相当大型の船でも映像は点になってしまう。それ以上拡大すると識別困難である。

朝食後8時30分から船内研修スケジュールにしたがって授業開始。波高は3メートル、突然

不規則な波がきて、授業中、団員2人が机ごと横倒しになった。けががなく何より。1クラス36名中船酔いのため6名欠席、出席者も半分以上は青い顔をしており、口を押えて出ていく者もいる。教官も何人かだめになったが、広部教官（埼玉大、東南アジアの政治事情担当）など「ちょっと失礼」と断って、ポリエチレンの袋をもって教壇の陰でゲー、女子団員が「先生、大丈夫ですか」と背中をさする、美わしくも羨しい役得に恵まれた。筆者と寺沢教官（東京学芸大、東南アジアの地理担当）は全航海中一度も船酔いせず、揺れがひどいと腹が減り、食べると眠くなるという状態で、背中をさすってもらうどころか「あんたたちは、人間じゃない」と化物扱いされた。

○ 授業のあい間にスポーツ・デッキに出てみる。渺たるうな原。鷗がたった1羽、船尾を、つかず、はなれず追ってくる。20分も追ってきたらどうか。2・3度ゆるやかな弧をえがいて後方へ飛び去った。鳥の世界にも孤独なのがいるようだ。

午後船内各室からの脱出経路、救命具、救命艇の説明、避難訓練が行なわれ若干緊張ムードが漂う。外航客船の国際安全基準は非常に厳しく、処女航海で氷山に衝突し、救命艇不足のために波一つない海で多数の死者を出して沈没したタイタニック号以来、定員の2倍以上の救命艇が要求されている。

緯度はさらに西に進み時計を30分遅らせて眠る。

### ○ 黒潮本流を逆行する（2月7日～9日）

2月7日朝6時のさくら丸の位置は奄見大島東方300キロ、障害物のない限り船は何百キロでもまっすぐ進む。クルマのように信号でいらいらすることもない。名のとおり黒々とした黒潮の本流を逆行中。水温は22℃、甲板は肌着1枚でも暑くなる。

今日は同乗の東南アジア青年から食事について苦情が出た。とくに和風の朝食は堪えられぬとのこと。政府側の管理官は、日本青年と寝食を共にするという条件で各国から選抜されてい

るのだから我慢させるべしという基本方針で、東南アジア青年担当たる筆者は苦慮する。方針は方針だが、さてわれわれが訪問各国の普通の食事で毎日暮せるだろうか、とても自信がない。結局、毎朝コーヒーとゆで卵（日本青年はなま卵）を追加することで落着する。

そうこうする間にも船はひとときも休まず進み、沖縄南方では水深7500m、琉球海溝の最深部の上を通過する。甲板の上から覗いてみても実感は湧かないが、明けても暮れても海ばかり、次第に日本の文化圏から遠ざかっていくことに感懐を覚える。本当にこのまま行けば外国に着くのだろうか……。甲板上は無風状態である。船が南西に17ノットで進み、黒潮が3ノットで正反対に流れておれば、本船の実効速度は14ノット、もし真の無風状態を14ノットで航行すれば、14の半分の7メートルをつけただけの秒速の風をうける。ところが甲板上が無風状態ということは、船の真後から船と同じ速度、秒速、7メートルの北東の風をうけていることになる。これすなわち、だいたい11月から翌年4月1杯にかけて吹く北東のモンスーンで、台湾をよぎる北回帰線から北海道の北端までの温帯モンスーン気候、フィリピンからインドに至る北緯10度以北の熱帯モンスーン気候の原因である。5月始めから10月末までの南西風とあわせて、南北分水嶺を境に風を受ける側が雨季、反対側が乾季になる。ルソン島は右半分と左半分でウエット・シーズンとドライ・シーズンは全く逆になり、左半分に属するマニラでは5月から10ないし11月までが雨季である。マニラにはサマー（夏）はないのだからいくらサマーといってみても通じないのも当然だ。大洋に出てみてはじめてモンスーンというものを文字通り肌で感じとることができるのである。

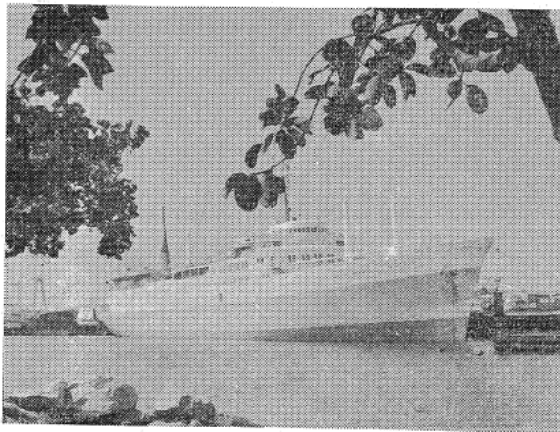
このようにして7日も暮れ、あくる8日も終日、海、海でまさに暮れなんとしたときに、誰かが島がみえると叫んだ。右前方、距離はさして遠くないのだが薄暮の中にかすかに姿をみせている小さい島がある。距離は12マイル、バシー海峡のバタン島とのことである。いよいよきたなあという感じだったが、実はまだマニラま

では丸1日以上かかったのである。

翌朝（9日朝）はルソン島西岸10マイル沖を海岸線に沿って南下する。ときどき灯台や建物がみえるが街らしいものはみえない。11時頃サンフェルナンド沖通過、3000メートルに近いプログ山の雄姿がみえる。リングエン湾の外側にまわり、さらに南下、4時頃海岸線に近い2000メートルのハイピーク山を望む。昼食はデッキ・ディナーで、厨房員総出のサービス、溢れるような緑の海岸線を船上から眺めながら、食べ放題の御馳走を賞味した。ひやむぎを3杯お代わりして腹痛を起した食いしんぼうも出る始末。夕刻には左手のバターン半島を巻き込むように方向を東にとり、コレヒドール島を右にみてマニラ湾に入った。いよいよフィリピンに辿りついたわけだ。日がとっぷり暮れると、沿岸に明滅する街や村の灯が金の鋏のように輝く。船は速度を落とし、遂に8時30分、マニラ沖に碇泊する。マニラの街とおぼしきあたりにネオン・サインが輝き、ヘッドライトの列が音もなく蟻の行列のようにしずしずと流れている。ルソン（呂宗）の壺を運んだ御朱印船、また、360年前、マニラへ追放された高山右近の気持などがしきりに偲ばれる。

### マニラの印象（第1日、2月10日）

船上からマニラを鑑賞する暇もなく、6時起床、朝食、第1装で全員エントランス・ホールに集合、本日のスケジュール等の説明があり、7時半には隊列を整えて下船、海軍ブラス・バンドと民族衣装をよそおった原地の娘さんに歓



マニラに憩う“さくら丸”

迎される。タラップを降りるとき1人、1人に笑顔でレイをかけてくれる。このレイはサンパギータ（SAMPAGUITA）とよばれる芳香を放つ純白の花で編まれており、きくところによるとフィリピンの国花だそうである。

埠頭における歓迎式には文部次官など政府要人が見え、遠まきに眺めている港湾労務者もおだやかな表情で、中には手を振っている者もいる。朝もやの中に椰子の木をあしらった個性的なマニラ・ホテルが望まれる。歓迎式のあとロハス大通りを4列縦隊でリサール公園にむかう。前後を警備の白バイが往き来し、ブラス・バンドに合わせて、隊伍堂々と進む。日本の経済侵略の象徴とか、軍国主義の復活だとか、そのように受けとられる危険も十分にある。われわれの上陸態度は訪問国によってさまざま、マニラにおけるこの行動は諸般の事情を考慮した結果であり、すでに前年9月末の10日間の事前研修において、そのリハーサルが行なわれている。国民的英雄リサール像への献花式、お祭好きの国民性、不安定な治安状況、その他もろもろの条件の最大公約数である。

マニラ湾に面したロハス海岸通り、リサール公園、周辺のビル、これらは非常に美しいもので、たんに旅行者のエキゾチズムによる錯覚とはいえない。もちろん、海岸に聳える椰子の木は珍しいものである。しかし、歩道の広さといい、樹木や花壇の豪華さといい、日本の公園



マニラの市民、むこうはマニラ・ホテル

とでは雲泥の差である。わたくしなど、宮城前や新宿御苑など手入れの行き届いた美しい公園と思っていたが、井の中の蛙大海を知らずと思われ知らされた。東南アジアの青年諸君の一致した意見は日本の公園が貧弱だということである。マレーシアの首都クアラルンプールは街全体が緑の公園で、国会議事堂、中央銀行などその風致に実によく合っている。シンガポールでも同じことがいえる。

献花式のあと、われわれはフィリピン大学を訪問する予定であったがストによる閉鎖中で予定変更となった。1月13日からストが始まり相当長期にわたっていることになる。この起りは産油国値上げに始まるガソリンの値上げで、これにジプニーという乗合自動車の組合がいっせいに反対したことにある。

この話は少々ややこしいが、フィリピンの現状を知るにはうってつけの材料である。ジプニーというのは中型ジープに簡単な改造を施した乗合タクシーで、つぎのような特徴をもっている。都市部の重要な大衆輸送機関で、走っているクルマの何割かがジプニーと違ってよく、その数3万台といわれている。霊柩車のように飾りつけられている。基盤の目状の道を直すぐにしか走らない。したがって曲りたい人はのり替える。運賃は10円位である。そして、大事なことはその所有・運営形態で、資本主がジプニーを貸し与え、労働力、維持費、ガソリン代は運転手がつことになっている。大衆は貧しく、ガソリン値上げを運賃に転嫁できないので運転手の組合はデモやストを打っている。資本主は水あげの4分の1をとることになっているので安泰だ。一般大衆はジプニーに味方している。フィリピン大学の学生はジプニー問題を契機に政府の社会・経済政策に対する不満を一挙にぶつけたわけだ。

われわれのガイドをつとめた多くの青年知識層は「3パーセントの人間が97パーセントの富を握っている」といい、また「大地主の小作人に対する所得の配分は、労働力だけを提供している場合が20パーセント、労働力プラス水、その他の費用が自前で、土地だけを借りる場合は

50パーセントである」という。それでは江戸時代よりひどいではないか。事の真偽はともかく、都内の居住条件のわるいところに密集するバラックや交差点でクルマが止まると、金を要求してくる、裸の子供が多い。

非常に子供が多く貧しい印象だ。先進国の人口増加率は年1.1パーセント、フィリピンは3.3パーセントである。フィリピンの1人当り所得は日本の4分の1位と思えばよいが、分布が片寄っているから一般大衆はもっと貧しいに違いない。対日感情は良くなったが治安は悪く不安定な社会である。上陸2日目にはアメリカ大使館前で小型の時限爆弾が爆発している。アメリカ人や日本人、それに金持ちはそれぞれブロックを形成して住み、塀をめぐらせ、入口にピストルを持ったガードマンを配している。小学校も塀の中にある。金持ちの行くショッピング・センターはアメリカなみに美しいが、缶詰や包装製品に飽きて、生鮮食料品を原地人の市場に買いに行くときはたいへんだ。まず、顔・手足を汚し、汚い服をまとい、ズック靴をはいて、メードを連れて行く。買物は原地語（国語はタガログ語）で簡単にやる。ズック靴は逃げるための用意である。大使館からも「白昼でもカメラなどブラブラさせていると、人が寄って来て強奪されるかも知れない。そんなときは税金と思って渡すよう。」と指示があったくらいである。しかし、これらの事情は悪い方の例であって平均的にはもっと良く、用心するに越したことはないということである。

話が少々暗くなったが、この日はその後ケソン市（マニラ市に隣接するフィリピンの首都）、金持ちの保養地である溪流公園アンティポロ、マルコス大統領夫人（もとミス・フィリピン）発案になる ナヨン・フィリピノ（NAYONG PILIPINO、フィリピン各地方の部落、住居の2分の1縮尺のミニチュア公園）などを訪問し、夜は船内でフィリピン青年との交観会が行なわれて1日を終えた。少々疲労気味である。

何しろ5日間で真冬から夏に変わったのだから。

カトリックとサン・ミーゲル・ビール

(2月11日)

フィリピンは住民の9割以上がカトリック信者で、宗教は決して形骸化しておらず敬虔な信者が多い。都心にある聖オーガスチン教会は、1599年に定礎がおかれ、1606年に完成した、現存するフィリピン最古の教会である。この期間は日本にあっては秀吉のキリシタン禁令が出されて弾圧が次第に厳しくなった時期にあたる。家康のキリシタン大弾圧令は1614年に発布されている。同年11月8日高山右近と娘、孫その他聖職者など350人以上を乗せた船が長崎からマニラに向った。マニラに着いたのは1カ月後の12月11日である。全市をあげての大歓迎を受け、手厚く遇されたが翌年2月5日未明熱病のため昇天した。63才、葬儀は官民あげての空前絶後の盛儀であったといわれている。わたしは現地の警官に堂内を案内されて、今日、次男の誕生日を思い出して聖壇の前にしづかにひざまずいた。

カトリックの国であるから物の名前、地名など聖人の名前を借りたものが実に多い。サン(聖)何々という訳である。その1つ、サン・ミーゲル(San Miguel)ビール工場の見学が行なわれた。なにしろ一行は飲み盛りの青年、しかもそろそろ禁断症状があらわれてビールときいただけで、ごくんと生つばを飲みこんでいる。

サン・ミーゲル・ビール(スペイン・香港にも工場がある)はフィリピンの独占的ビールメーカーでマニラ工場の規模は日本の大ビール工場に匹敵する。生産工程、びん詰め機械など、日本のやや古い工場に似ている。製品のスタイルは「アサヒ・スタイナー」と同じで小売価格は80円位。工場側で御駆走を用意しているとのことで、エレベーターで11階へ上って驚いた。エレベーターは10人乗りが2台、ピストン運転でも350人を運ぶのに1時間位かかる。先着順に大ビール・パーティが始まっているのだ。数百人の席が容易された大ホールは一流レストランの水準で、糊のきいた白の制服に身を固めたボーイ20~30人がサービスしている。料理はスペイン風のフィリピン料理で、バイキング方式

でつぎつぎに運ばれる。ビールは飲み放題、テラスに出るとマニラ市が一望のもとにおさめられる。マニラはコレラ汚染地区で生水、果物、なまもの一切厳禁されていたため、ビールによってはじめてマニラの水にありついた訳である。ともかく、全団員にとってサン・ミーゲルといえば今日なお思いは同じと信じる程、相共に感激したものである。もっとも、サービスにつとめたボーイさんがあの料理にありつくことはまず考えられないところ、ここに大きな問題があるのだが。

この日はこのあと独立の志士リサールの記念館にまわった。リサールはスペイン総督軍と一戦を交え、捕えられて1896年に刑死した偉人である。野口英世に似た風貌で、医者、弁護士、作家、彫刻家でもあった。処刑されるまでの収容所が記念館になっており、民族の幸福を願った心の温かいヒューマニストが数々の遺品から偲ばれる。わたくしには、大理石の彫刻がしっかりとした落ち着きをみせていて、とくによかった。大変な母親思いでもあったそうだ。

カルチュラル・センター(2月11日夜)

フィリピン・カルチュラル・センターはロハス大通りと海岸との間にある大劇場で、東京に住む団員の話では今日の東京にもこれ程立派なものはないそうである。建物、内装の量・質ともに堂々たるもので、ゆうに3000人は収容する(5000人説もある)この劇場で採算をとろうと思えばたとえマニラでも最低1,000円から2,000円の入場料となるだろう。これはふつうのマニラの市民にとっては手の出ないものである。すぐうしろの海では早朝から貝をひろって生活の糧を得る漁民もみられるところだが、一体誰が何をみるところであろう。

何か割り切れないものを感じながらも、11日の夜はここで7時半から実に12時まで日比民族芸術交歓会が行なわれた。プログラムの導入部で何とか博士一族のピアノ・ソロ、バイオリン・ソロ、ソプラノ独唱、聴衆の何人かに指示させてできた旋律をテーマとする即興のピアノ・ソナタなどが披露された。しかし、これらは音

楽の殿堂にはふさわしいかも知れないが、日本の青年には耳なれたものであり、大した興味も湧かなかったようだ。圧巻は、何といても本番の民族舞踊であった。一部は万国博でも演じられたものだが、出演者の数、演技力の水準、民族衣装の美しさで問題にならない。圧倒的な美しさである。大きく分けて原住民伝来のものと、スペイン風のものがあり、竹のダンスとか椰子の実の踊りは前者に属し、扇のダンス、グラスのダンスなどは後者である。

原住民系統のものは非常にリズムカルで激しい踊り、スペイン風のものとはどちらかといえばゆるやかな舞である。いずれも長い修練を要するような曲芸的要素が組み込まれており、見事なものである。しかも、これらの民族舞踊を伝承・維持しているものの中心は大学生で、とくにマニラ女子大学の舞踊は有名である。とにかく、クラブ活動の発表会とかお稽古ごとの水準ではなく、一国の芸術を代表する一流のものとして十分鑑賞に堪えるものである。

いま、こうして、筆をとって思うことだが、ああいった民族芸術はあとでいつでもゆっくり文献やレコードで鑑賞できそうに、そのときは思うものだ。しかし、こうして帰国してみるともはや日本中どこに行っても鑑賞は不可能である。とくに東南アジアでみやげ物の物色に専念する日本人が多いのだが、たいてい、がらくた買いに終わっている。わたしが、これから行く人に本当におすすめしたいのは、許されることなら民族芸術をカメラとテープに納めることである。あまりパチパチやるのもみっともない。おのずから限度がある。テープが許されないのならレコードを求めることである。レコードも日本では手に入らない。とにかくその国独特のそして一流のものに触れてくるのが大事である。

### タール火山（2月12日）

マニラ南方70キロにタール湖がある。びわ湖の半分くらいだろう。フィリピンは火山国。このタール湖の真中に小さな山脈がある。59年の休止の後、1965年突然噴火を始め、2,000人

以上の死者を出したという。そのときこの島の真中に、また芦の湖のような湖ができたのである。タール湖の周辺は阿蘇外輪山のようになっており、昇りつめたところに急に視野が広がる。このタール火山は外山輪よりは低いので、まことに珍しい眺めである。

タール湖に至る道は農園である。大地主の経営になるプランテーション（大農園）が多い。かの20パーセントないし、フィフティ・フィフティの配分をうける農家のたたずまいがみられる。熱帯植物のあいだに木蔭に憩うような形で高床の住居が作られている。電灯のない家も多く、石油ランプやカーバイト灯が使われている。どんな貧乏かと思われるだろう。

しかし、貧乏というのはそういうことではなからう。マニラには、貧民窟のようなところがある。どんなに汚れていようが掃除などはしない。悪の温床である。ところが、農村では家のまわりは花ざかりで、ほうきをもって掃いている人がいる。豪華な観光バスは冷房で窓を締切っているのを見むきもしないが、予算の都合でわれわれのは現地人の乗るのと同じバス、窓はあけ放し、どこでもここでも大歓迎で大人も子供もちぎれんばかりに手をふってくれる。たとえ石油ランプの生活でもそこにはある種の安定があるように見える。

典型的な熱帯植物栽培園では一番背の高いのがココ椰子（椰子には何10種類とあるが、われわれに最も知られているのがココヤシ）、その下に樟のようにこんもり枝を張っている大木がマンゴー、その下、桐の木のように放射状に枝の出ている、その扇のかなめのようなところに、木の割には大きな、30センチばかりの実を千成瓢箪のようにつけているのがパパイヤ、足もとにはパイナップルという具合に重層をなしている。

ココ椰子の葉は月に1枚出るので落葉跡（幹についた横の筋）を数えると樹令がわかる。どこまで伸びるかといいたい位のもある。クワランプールのレークガーデンの芝の上で休んでいたときであるが、突然地ひびきのするような音、椰子の葉っぱ、といっても長さ5メートル

以上もあって根元は根棒のようなやつ、これが何十メートルも上から落ちてきたのである。椰子の実だって頭に当れば死んでしまうと思うのだが、案外みな平気でいる。

さて、われわれは白煙を吐くタール火山をあとにし、タール湖の北を東に20キロあまり行って北上する。と驚いたことに右に海がみえる。マニラ湾はたしか左のはずである。実はこれは湖であって、びわ湖、あるいはもう少し大きいかも知れないマニラ東南に広がるバイ湖である。

沿岸をどんどん走るうちに気付いたのだが、そして、これは貧しい国のどこでもそうだが、付近の民家に比べて小学校が立派である。そしてそこで教鞭をとる先生は、たとえ言葉は交さずとも、住民や生徒から尊敬を勝ち得ており、先生自身にも聖職者意識がみちみちているように思える。インドでは特にそのように感じられた。このことは今日の日本においても絶対に必要なことだが、残念ながら教育も市場経済のメカニズムに埋没しているのである。

バスはやがて広大な敷地にあるモダンな建物群の中に止った。周辺は緑の芝生が美しい。国際稲作研究所、通称イリ (IRRI, International Rice Research Institute) である。ロックフェラー・フォード両財団の拠金によるもので、わが国の青年研究者4名も在籍中。われわれは所長からお座なりでない熱心な講義を受けたが旅の疲れか、半分は居睡りで汗顔の至りであった。

このような研究の結果、たとえばインドの乾季にも適する品種の稲が得られたとする。インドの長老、サルタンを集めて説明会を開く。

「年に2回も米がとれるんですよ」と何時間も話す。長老曰く「それは非常にけっこうだ。と



国際稲作研究所

ころでわれわれは永年、年に1回しか米を作らないことにしている。だからもう1回は日本人が来てやってくれるんでしょね」と。これは本当の話である。果物や食糧が豊かで着るものも要らない。日本人のような働きぶりは狂気の沙汰か、驚異の的だが、別に尊敬はしない。軽蔑ないし同情はするかも知れない。

この日は日本の技術指導者が竹細工や貝細工を教えている農村開発研究所にも寄った。2国間方式による政府技術援助とはこんなものかという程お粗末で、日本人技術者の使命感もしぼんでしまうのではなからうか。予算がないとかで、去年の11月19日、ヨーリング台風で屋根のあちこちが吹きとんだままになっている。

今日は実に延々300キロを冷房なしで走破し、くたくたに疲れて帰船した。われらが宿「さくら丸」はいともやさしくわれわれを迎え入れてくれた。冷房が有難い。

(次号につづく)